〈編集後記〉

会誌に身近な話題の投稿を期待して

大変古い話ではあるが，ある新聞の地方版のコラム欄を１年間連載したことがある。昭和63年３月11日の「ウグイス」と題して執筆したコラム欄では，「３月になると，３年前から毎年ウグイスが３坪ほどの狭い庭にきて，素晴らしい声でさえずる。都市化にともなって，私達の周辺から季節感がなくなりつつあるが，春告鳥の名にふさわしく，このウグイスの声を聞くと何とはなしに春の気配を感ずる。今年も，３月２日朝，放送かまたは飼い鳥かと思ったほど，ホーホケキョと繰り返し初鳴きを聞かせてくれたのである。(中略)。ところで，私の家は彦根の市街地にあって，近くには車の往来の激しい巡礼街道が，また隣接してパチンコ店が２軒もあるなど，典型的な新興住宅地である。近くに山や林はもちろん，大木１本もないような新興住宅地の中心に，なぜ毎年ウグイスが訪れるのか。その理由は，まずウグイスが英名でブッシュ・ウォーブラーと呼ばれるように，ササ原などのヤブを好む鳥だからである。次に，私の家の庭は自慢できることではないが，以前住んでいた家から根に土をつけたまま運んできたウバメガシ，ユキヤナギ，モクレン，マサキ，イロハモミジなどの低木が，放置されたまま根づいて，雑草とともにヤブとなっているからである。したがって，ウグイスにとっては，手入れの行き届いた近所の立派などの庭よりも，ヤブで覆われた私の家の庭の方が快適環境なのである。(後略)。」と禿筆を呵している。

実は，このコラム欄連載の年の５年前に家の裏隣にパチンコ店が建設されたが，その際に協定にしたがって，100ｍほどの駐車場の境界に沿って１列に，樹高数ｍほどのアラカシと，その下にネズミモチを植栽してもらった。数年もすると，植栽したアラカシは７，８ｍに生長し，ネズミモチはヤブ状に茂るようになった。その途端，毎年，早春になるとこのヤブのなかでウグイスがさえずるようになり，付近の大人も子供もこのウグイスとの触れ合いに満足し，心なごまされてきた。一方，このわずか１列に植えられたアラカシとネズミモチの縁に並行して幅１ｍほどの里道と３面張りの排水路がある。このとても豊かな自然とはいえない貧弱な空間には，アラカシの繁茂した枝葉のなかにオナガ，ヒヨドリ，ムクドリ，モズ，メジロ，ツグミ，キレンジャクなど多くの鳥が，また水深が数㎝ほどの排水路には小型のコイ，フナ，ナマズやカメ，ザリガニ，ドジョウ，それにこれらの小動物を餌としているチュウサギまでが見られるようになった。私の家の庭といい，植栽されたアラカシとネズミモチのヤブやほとんど水の流れていない排水路といい，たとえ清澄や豊かな自然に恵まれていなくても，水，緑，身近な小動物などとの触れ合いの場を取り戻したり創造したりすることは，私達にうるおいとやすらぎを，また子供の健全な発育・成長さえも保証してくれるのではないだろうか。

今の混沌たる社会情勢のなかで，地球温暖化など地球レベルの環境問題があらゆる場面で大きく悲観的に取りあげられている。こうした時代にこそ，身近で小さな問題や話題であってもよい，楽しく夢がもてて心温まるような話題が事例報告や随筆，意見，活動記などとして，本会誌の誌面に登場してもらいたいものである。最後に，このような視点からの会員の投稿も期待しています。

（小林圭介）

編集事務局の移転

今春，大学の転任にともない，編集事務局は奈良市内から大阪府大東市内に移転しました。また事務局も大阪自然史センター内に移転したため，編集事務局で預かっていたバックナンバーの本会誌や寄贈書籍等は新事務局に移されました。かくして編集事務局の3月はあわただしく過ぎ，早，6月。まだ整理がつかない研究室で，遅れている会誌編集に追われています。

さて，大学からの眺めは，春日山原始林，若草山，東大寺の甍といったものから，竹林が斜上する生駒山系の地域景観へと大きく変化しました。大阪側の生駒山系は奈良側に比べてかなり急傾斜ですが，それでも斜面中腹近くまで建物が多く建ち並び，大阪側と奈良側では土地利用が大きく異なることを実感しています。先日，四条畷市の室池（むろいけ）に学生らと出かけました。人里近い場所にもかかわらず，ビュルテとシュレンケからなる高層湿原が残されています。開花期が過ぎた植物も多かったのですが，モウセンゴケ，ミツガシワ，コウホネ，トキソウ，サギソウ，カキツバタ，クリンソウ，ミズバショウ，オオバギボウシなど多様な植物が生育しており，うれしい驚きでした。

現在，研究室の学生は学部生と大学院生あわせて14名。近畿地方の河川や田圃，大和三山の竹林拡大からモンゴル草原まで，さまざまなテーマに取り組んでいます。順調に進んでいるとは言い難い調査研究ですが，成果を本誌に掲載できる日をひそかに期待しています。

今号に特集記事は組んでいませんが，フィールド研究を中心とする原著論文や報告など貴重な労作を掲載することができました。次号は，先にシンポジウムを行ったナラ林に関する特集記事を掲載予定です。2001年6月号に山倉前編集委員長が，原稿不足による遅配のお詫びと投稿へのよびかけを編集後記に熱く記されています。その状況は今もなお続いています。会員のみなさまの原著論文，報告，エッセーを編集委員一同お待ちしています。

（前迫ゆり）

【査読御礼】

本号の会誌掲載にあたり，編集委員以外に瀬能宏氏，田中哲氏，波戸岡清峰氏に査読いただきました。厚くお礼申し上げます。